



小栗外傳

六

~13
3919
7



13
3919
6

寒燈 小栗外傳卷之七

東都 絳山歎 醜陳人戲編



第十一編之下章

不在活下再說照天姬之橫山之逐お襲おれ夫之行い也へをさ入るては治を
あ危らうりけんをを王を甲斐としく敵と戦ひがこれを討れ城一人を
い何方ととれと并方なる足まりて走る城を雄く一れ女子あらく
あ照天を誦めし功を我故々なれ六浦の御はひをりそも此城を素直を
あ尋ずふ武を國令澤る待從川の辺に住漁師細六といふの女見える
あ母を波浪とりりし城を産む強のち細六を没命たり波浪を女乃
い一人世つらは生當なきまらふあらく飢母も及ぬべらるねらふ其里小

小栗外傳卷之七 十一

琵琶法師のありは、これらも昔とて同月、女子がまらつたり、しりぞき度で
あつた、失ふたれ、夫婦悲嘆、沈むるを、その血属、これを誅め、亡ふと
想ひ、慰めよと、娥を貫く、若子とらさ、その若浪と子故、おののかづら
もまう、おんぞいと、悩まう、しりぞき、娥を琵琶法師、母まら、已が、おののかづら
なり、乳け、あつた、そま、ひかれ、きり、きり、方へ、乳く、まはせ、やと、海倉、よ、赴
ふ、此、南、阿、小、栗、助、を、四、女、あ、なり、て、その、乳、く、を、亡、ひ、く、縁、ふ、よ、ら、く
此、夜、涙、を、抱、き、つ、り、お、て、ま、う、と、娥、を、琵琶法師、お、ま、れ、か、り、く、成人、が
三世の、作業、や、悪、う、り、え、ん、祝、の、縁、ふ、清、く、て、養、祝、二、人、相、續、く、没、命
け、ん、娥、の、ひ、と、り、海、士、舟、の、楫、を、断、つ、は、お、絶、つ、と、ら、ら、ん、若、ん、使、も、た、く
嘆、ま、と、と、泣、き、な、く、若、き、女子、の、只、お、り、世、の、た、ら、ん、ま、い、ら、の、か、く
急、や、せん、角、や、と、想、ひ、ま、ら、ん、若、く、若、母、慈、良、と、小、栗、家、よ、給、ひ、今、う、の、ま、た、と
なり、し、よ、く、縁、を、く、風、声、ふ、つ、れ、が、彼、而、性、を、身、の、ろ、ろ、の、幸、な、れ、と、お、
は、え、の、ら、開、く、れ、と、も、の、め、あ、と、を、ま、ま、あ、故、を、な、ら、ん、か、り、し、途、お
志、を、横、山、う、る、お、う、り、ま、れ、憂、川、行、お、沈、む、る、ま、を、照、天、姫、の、情、よ、困
横、山、が、許、お、う、り、と、し、て、給、ひ、し、て、居、ろ、お、か、は、故、を、り、て、照、天、の
危、難、を、助、け、故、郷、六、浦、よ、伴、ひ、し、ま、つ、且、と、七、年、か、ほ、ら、も、る、一、つ、あ、つ、た、
む、し、智、し、り、し、く、も、失、せ、く、ほ、ら、ん、ま、き、方、も、あ、く、左、右、と、ら、ら、日、の、ち、や
若、く、お、ら、れ、今、夜、を、ゆ、う、お、め、れ、一、夜、を、お、し、明日、こ、ろ、静、う、お、知、音、の
目、を、く、と、行、従、川、の、辺、を、往、つ、つ、つ、お、く、お、川、辺、よ、ま、し、お、づ、る、白、玉、お、り、娥
此、邑、よ、あり、し、一、面、の、交、せ、し、演、七、と、ら、お、り、の、お、ら、れ、お、う、夜、の、お、
宿、を、か、く、お、や、其、柴、折、戸、を、敲、け、お、か、り、回、意、て、四、十、小、余、の、女、紙、燭
して、坐、ま、り、讀、む、所、の、城、燈、籠、よ、と、し、る、お、よ、露、お、ほ、え、な、り、お、ま、ま、

琵琶法師

琵琶法師

一門差しけるかと思ふ家へおぼえあり。この家主のうりける
 女も今さう化へ行きたるは是非宿を借ふりやと云ふ宿を
 ぬくの所家へおぼえあり。と尋ねれば女は涙を流して申す
 此家今の我ま小助と申す住人の住たる所。と云へば小助の
 本屋も雨漏の地へ他の知音を尋んと云ひしが。そも又宿を
 ぬくの力形きこふなり。且そのまの四方を呻吟人の姫君方
 不知つゝ小宿を借りりやと奴等が相持廻りて武藝國へ赴く考
 ぬるる付ひし人へ後れ途へ迷ひて申す。ひまふりありければ
 今夜のあはれはしてしてと云ふやと。慇懃と頼むる主の女
 悲しくも冒目簾しく笑衣をまきまきとけり。あるちあら
 やうと云ふ。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。けり。

人の宿借とを禁あり。且まも家へ居る宿へ。かぞへ長引か
 又まももさう由ありける上宿のあみも習ひぬ。途へ迷ひし
 悩ましくも。悩ましくも。悩ましくも。悩ましくも。悩ましくも。

喜せども忍びくおとせ。いさ。這裡へ入らせ多くと付く。二人の
 家へおぼえあり。主女ぬれと心をそへ一室の裡お語り物
 さて中へおぼえあり。旅の憂りのあてめを伴ひし人
 ののび。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。

酒の愁を拂ふ玉言帯と申す。一杯と
 買ふ人もさう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。

さらさらして。さう。忍居る夫の頑。ゆして。ゆして。ゆして。

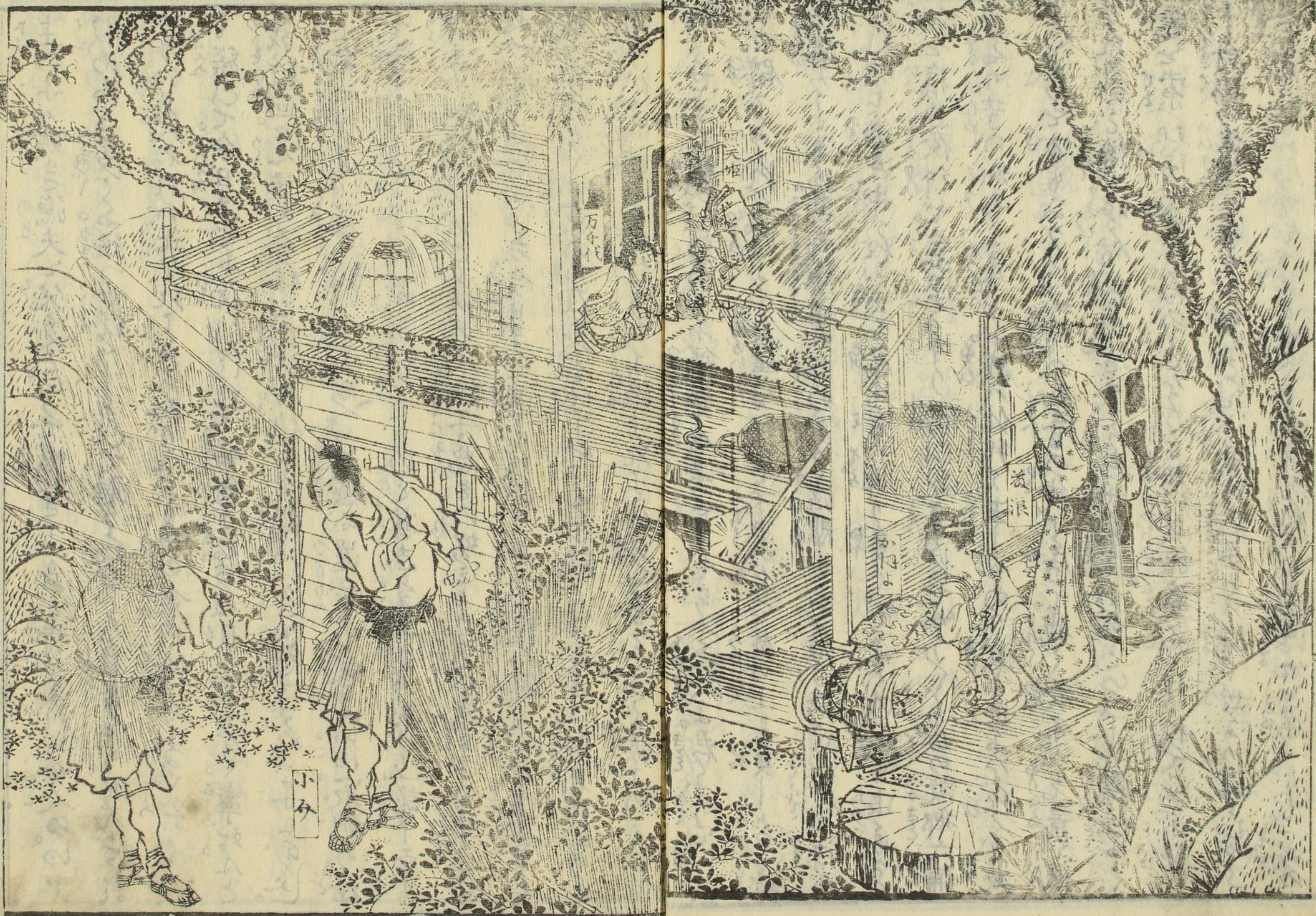
出しまつた。さういふと、おのち付るおのち忠とち父へ小げむい上尉乃
 柵の陶と提提芒けぬ去去。照天城の主女の忠信とて、款待をせむ。
 心安堵はけ、助重の行来いゆゆと、おひ生まれ業が、おせの
 ららあも照天城のこころに、おのさへおひらで、涙はあづみおひくく。
 は居々と城誅や、争う。いうは姫君殿のゆきを、そそ東なくおほして、お
 ぼ嘆とまると、なづら縁を知らしめ、おとく。小栗判官代助重忠と
 中て、関八州のそのうち、お打物とて、鬼津とくも、おとく。お方より
 横山とて、敵對と、當障を、芥めて車を止む。お似たり。いつて、お二矢の
 めきを、強くおわしめせ。つ、お旅の宿より、お耳石のりの、お世の中に
 みえりの言流へ、直しお明日の奴家お記し、おのを捜索。こゝに、お身を
 忍び、おちき。お角もせんじ、お小必と、お岨とくおわし。おと。おあかんと
 何と、奈何と、おと弁か、お胸を、苦しむ。おり。おは、折々、隔る
 紙門を、さとし、おと、おと、おのり、おは、おと、二人の、おと、おと、おと、おと、
 おりて、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 と、二人、お前、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 いう、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 どの、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 こそ、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 くれ、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 も、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 ちづの、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 曹、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、

何と、奈何と、おと弁か、お胸を、苦しむ。おり。おは、折々、隔る
 紙門を、さとし、おと、おと、おのり、おは、おと、二人の、おと、おと、おと、
 おりて、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 と、二人、お前、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 いう、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 どの、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 こそ、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 くれ、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 も、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 ちづの、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、
 曹、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、

此家よ宿りを借てまよ還命とて此日以迄と想ふたれめを遣へん
 こもめめめと我もめめと喜びの涙を流すもせり。照天姫の我天の
 身とてまひはく万代わらうつ對ひ殿の平生を宣らせ。叔父万代
 ぬしはあまをばはしとて斯くも奴家も照天をてんごり。不屈の
 所は不意對面するこそ堪へられ奴家もてんごり。不屈の
 の縁故のゆゑ。そのゆるやうもあまへんせんか。おぼろげなる叔父なる。
 今に干隔防るがうゆ漁夫のやを忍びぬる。業の始終をすべし。縁と
 海り同く万代とてさういふ涙をぬぐひ想ひ出ても情なや。まは
 應永三千年父上小栗満重と銘倉殿の山不審うけ。正領をまきむ。誓
 居して父の科のなれすと嘆れさせと一色が謀言かたへられ君の怒は
 まして自ら多言を攻まふ父上これと以後とて我一色と戦ふ。怒のやとを

知らせましく想ひのあつ小鎌倉後まさせせや。あまふ君ふこうとせん
 こと辟ことわれは潔よ。自害をりて不忠の名を死の上も負いとて遂
 生害ありまふ其對童子の弁のさう泣悲しとて居りはくと母人海女
 られ城を逃と出されと世を忍ぶ身。憐れ多く。そよよの風も遠きと
 心を痛め夜行てまひとて忍びつ。幸じてやうくと母の故郷六浦
 ぶらり昔の知音と尋るる。或は化邦も去りもあり。且と世かなん人と成
 身とあま方もあつし。小鎌倉の知音の残り居て我く親子が光景を便
 ならぬのと憐れ。あまの居るらち世家も小女といひし。親住ゆし
 妻と索ひはし。さいとおのこなりと母の波浪童子をほれてこふ娘の
 そよまき。あまの母の云々こもくふ。おとこを小栗の乙子とて。おとこはほくひく。
 今よりして小女を父とて。あまの母の云々こもくふ。おとこはほくひく。

六浦の
漁村
母子奇
遇



萬代

五

川栗巻之六

五

小今

萬代

天姫

波

七

主の子が賤き漁夫と父うと。いふぞ嘆ききとくんと。肯ぞられた母人のい中
腹のちうまきつは泣つて泣つて。ひて聴はれたる自害をも。せんぞう
中りにくえぬれが正なれ。とらおりのども母の命れ冷とくあふ。公なりた
も落して今日まてお及びはれど。を命をとりぬ日とてもぐく寧死んと
幾許回え母のされど亡父の仇と。想ひ一息を怨きざれば子よあじ
と我と心をとり申。はくごくも兄公小還舎へ父人の血取那の程
を告まぬもそもに敵と付んぞりのと其志まのありおが。語中そも
凍りや我母人のく終る人終子悪そこの娘より。兄を尋す父の旅祭を
めうし止めあふゆ念今日まて過。いふい。今夜不料人く小還舎しと
幕。それとく兄公の所在家を。いひねと。おひねと。おえなは。照天のしめえ
万千代物語とてを。せうら。お泣し。たとの。涙け。と。お涙。の。こ。わ。き

これ。か。や。ら。涙。と。か。ね。だ。判官代助。まが。控。堂。村。よ。来。は。る。を。切。あ。し
身。刺。の。一。件。毒。酒。の。危。難。且。前。刻。お。追。す。お。遭。ひ。散。と。ふ。なり。夫。の。行。赤。と。あ。す
ま。は。手。心。を。涙。あ。ら。ら。に。泣。り。く。れ。万。千。代。を。父。も。是。赴。を。年。に。慕。い。た
助。を。と。り。え。糸。を。え。んと。お。ひ。ま。や。行。赤。を。ね。ね。と。う。べ。い。この。も。い。う。と
忙。然。たり。其。時。城。と。と。と。み。出。い。り。お。和。子。き。み。前。刻。より。各。告。り。さん
と。お。ひ。ひ。は。れ。ど。姫。君。の。物。語。い。ま。あ。妨。な。れ。ば。さ。し。む。く。人。を。け。り。し。が。和。子
と。奴。家。を。潰。こ。そ。う。られ。ま。が。う。を。う。な。れ。兄。背。と。る。知。り。や。あ。ら。は。る。や。奴。家。が
身。と。這。般。く。この。事。お。り。と。有。枝。方。を。お。も。ち。ら。も。形。く。詳。し。語。中。と。お。い。だ
万。千。代。尋。ま。き。さ。み。より。さ。て。お。母。の。あ。い。ま。お。姉。姐。と。お。て。ま。し。は。ま。さ。り。お。泣。き
の。姉。は。よ。と。互。ふ。ま。も。と。ま。と。り。り。に。喜。び。涙。を。啜。咽。たり。万。千。代。を。泣
目。を。ら。ら。と。い。ひ。お。姉。と。い。ひ。兄。姐。と。い。ひ。不。圖。遭。ふ。を。お。な。む。い。な。れ。ど。年。二。三。日。以

東海道卷六
廿二

念いしは兄小入をせざるこそいと之封も味まほし。あな意しやと嘆き
 照天姫も我まの去向いりやとせし出。ほども涙ふふし沈む城の二人が根
 を。ごこととせし共涙袖や。あなねむり形。あな者浪と先年多氣
 落城の折うら万千代を伴ひ此地方小忍事なり。小介がりと人嫁まきけで。
 然る今夜不意眉目好小女の二人来つ宿と借りんといふを聞く俄小
 欲心を發し彼を賣てよれ價を得んまのと酒買ふ人と偲りて同里
 なは國戸小常陸といふ所のありは彼が彼がりと人往よく高紙信じて還
 事し知る三人一所は集令ひ物語りするまめを喧問えく。こゝに
 不審は。常陸と物陰小忍が。おれおのれ一人蜜中か忍び入て紙門
 の対面を潜めて立々それ。一人と照天一人と城めて万千代と名告達ひ
 助きがごとと語り出互に嘆け居るなれば。うち驚きて我子の城を獲と
 殆裡小入んとせし欲心尚中まどして胸に一物を巧と出。そまふなま
 ちく噴嚏。目今還り事するまめめてさ。紙門をおくむけぞ。
 三人の騒ひしこれを見るお者浪めてありなれば。お入をさ。あとの
 末景を伴ふまへ知るまも者浪の傍つてまひと体色灰。三人は打
 ひひく。今我く身のうち。鎌倉屋を憚るままと頼む小介
 あな小栗の人と云こととせし。今もあれ夫の還り事ま
 さん射く斯く居るを。怪もあらねん。必定なり。よりて姫君を
 我知識方小忍。其を伴ひしと忠告。目今母は。結
 城とこれを懸く。万千代の言はることもある。目今母は。結
 の未。何となく心伴。奴家もまに伴。あなとあれ。者浪のそま
 なりが。と。涙。は。は。は。と。口。は。は。は。と。

東巻之六

廿三

おくて大息を衝さへほどまでせめてさげまへせし心は雨ふるまへ
 彼を往く程に入らざればと暫時また多くと再び外の方にお出
 城を向う後安堵程が蜜ゆその殿へははしむて夜にお出居の方
 物も忍び申す一人の漢子と松語を耳をそとてま聴よ照天を愛
 とのし高深なれば大まきお尋ねはは猿と母の心をもち然し漢子の
 母を誦められむを浪怒腹をちて云汝知れどもや助きとこれと仇
 照天のその妻よりよりて彼を愛しては價をとり汝をよと榮利とま
 ぞくあつたる足良斗ふのくもや親の公子志ふはと世流の宜なり
 親の意悲を弁へよとまきまへあつて云懲り流るあつてもま
 嫉妬を容れられむを悲し心程は謀をりけらら笑とやと申す
 さざり我をおぼえをいふで嫉しとぞらざらへやは意の辱たさ
 笑へ下はつてのり今姫を愛するも我も母子一生次送るべし宝を
 母は知れぬとばは姫の肌おはけり守り同浮檀金の親るは如意
 宝珠の厨子お入をておまのこれ千金ありは新き宝をばは向此
 外は菱令白銀の宝まのり今僅なれ今をば人と姫を賣るも其
 宝人の物となり形ん不如心をなくし欺し其宝をとりあり我の
 利をばらんと欺きければは浪素より欲心深きものかれば編うはと知
 らばしていと毒びて居ひたりこれ其内なる今宵姫を殺し宝を奪
 と念どる休斯てそ夜も更閑なれば照天をも城をも寐さしなれと宝を奪
 りん心おれば照天と城とを隔て寐さしなれ万代の母の志氣は
 けとる嫁と議蜜小娘と已とる卧所をかく睡襖被ので寐あり照天姫と
 者浪が心息くしれを知らば偽りてよく欺けを毒ひ危ふきと逃れ易は

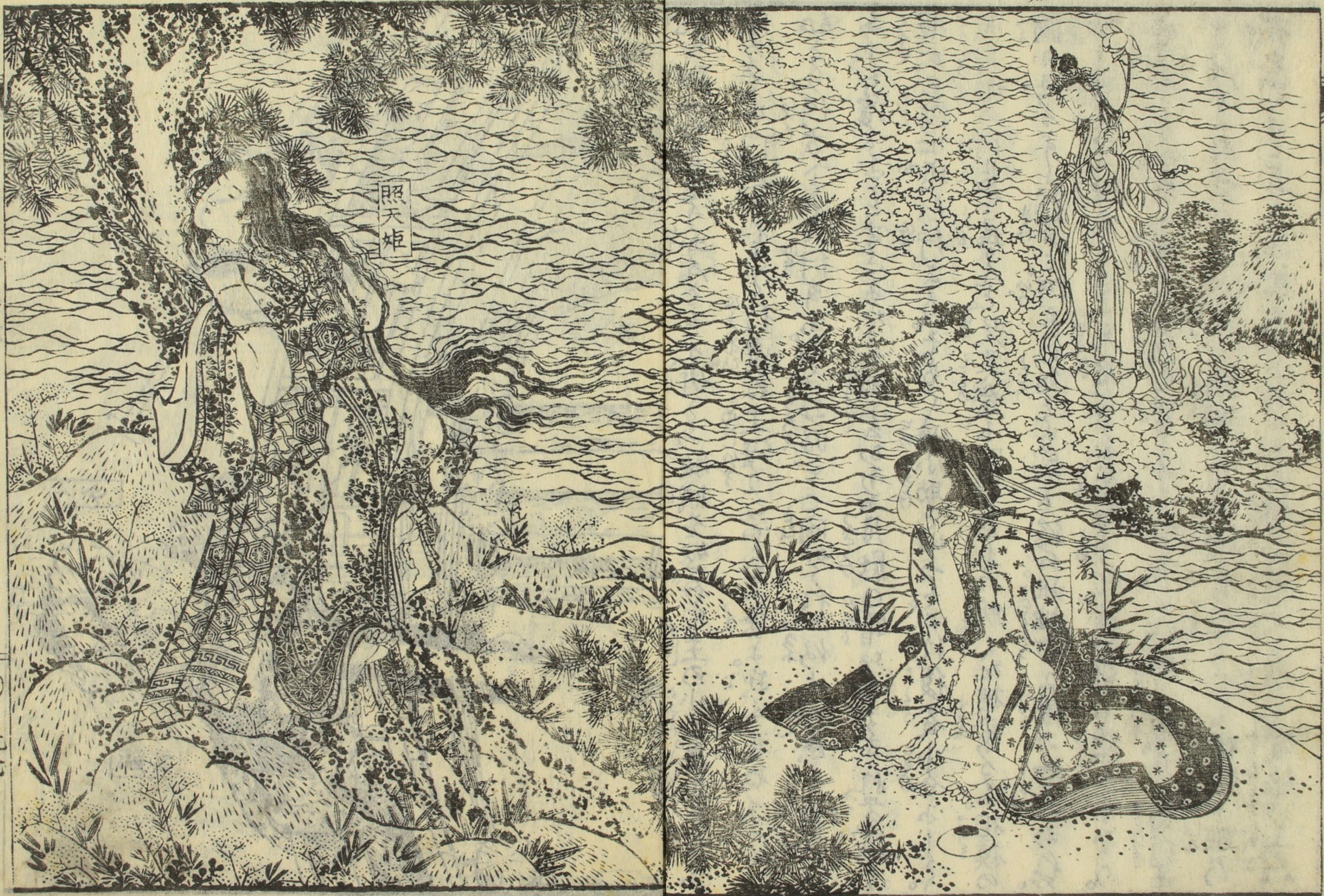
おくて大息を衝さへほどまでせめてさげまへせし心は雨ふるまへ
 彼を往く程に入らざればと暫時また多くと再び外の方にお出
 城を向う後安堵程が蜜ゆその殿へははしむて夜にお出居の方
 物も忍び申す一人の漢子と松語を耳をそとてま聴よ照天を愛
 とのし高深なれば大まきお尋ねはは猿と母の心をもち然し漢子の
 母を誦められむを浪怒腹をちて云汝知れどもや助きとこれと仇
 照天のその妻よりよりて彼を愛しては價をとり汝をよと榮利とま
 ぞくあつたる足良斗ふのくもや親の公子志ふはと世流の宜なり
 親の意悲を弁へよとまきまへあつて云懲り流るあつてもま
 嫉妬を容れられむを悲し心程は謀をりけらら笑とやと申す
 さざり我をおぼえをいふで嫉しとぞらざらへやは意の辱たさ
 笑へ下はつてのり今姫を愛するも我も母子一生次送るべし宝を
 母は知れぬとばは姫の肌おはけり守り同浮檀金の親るは如意
 宝珠の厨子お入をておまのこれ千金ありは新き宝をばは向此
 外は菱令白銀の宝まのり今僅なれ今をば人と姫を賣るも其
 宝人の物となり形ん不如心をなくし欺し其宝をとりあり我の
 利をばらんと欺きければは浪素より欲心深きものかれば編うはと知
 らばしていと毒びて居ひたりこれ其内なる今宵姫を殺し宝を奪
 と念どる休斯てそ夜も更閑なれば照天をも城をも寐さしなれと宝を奪
 りん心おれば照天と城とを隔て寐さしなれ万代の母の志氣は
 けとる嫁と議蜜小娘と已とる卧所をかく睡襖被ので寐あり照天姫と
 者浪が心息くしれを知らば偽りてよく欺けを毒ひ危ふきと逃れ易は

びつり。と公安塔のふとふきよりの心そいふ身まふれぬが既ふ睡らんと
 ころいれさうやうな体声して呼吸とりのあり誰ううんと眼ふぶき
 着るふ嫁あてのじうはこゝろゆるそと同や女声を低くしやう。好
 中と恥うまうれこゝろがら我母波浪の公さままふなうて豫く助さる
 と其間能くうと姫君のその死遇の方でははませの腹悪しうあとし
 失ひまなせんとのれを奴家まて誅めはまどら聴り入き舞もこえ
 福がゆのういそ危や早く此西をま去ま人とさしじまが娘をばさ
 奴家が命惜うと後と父の仇と付ん才のみごのふ死ん不孝におんこの
 教まうせ脱うたけの脱まんと伏西をたび出まがさうらがはひまふん
 ころとくくと急うとて女姫の衣裳をまめめんと守本まの首ふを裏戸
 の方より逃道出うり断とも知らざる波浪を照天を殺し財宝を奪まんと
 想ふうと待静ま体を待とまうおき寺の鐘がうくと音のうま指次偈
 めて教ふまの既よ夜はふさうりよけの肘分はよとはし。照天が臥ふ
 忍びうの屏風の外めて寝るも熟睡まるとおぼらねが試は燈火とうち
 消し尚音も形しはとあまきりと完示し隙し移う体し首次わえつ
 屏風をかり除け睡候のうふをかから。拳も馳まこと突まねが嗚呼
 と叫ぶ声とてとと睡襖を首にらうらうらうらうらうらうらうらうら
 たてど失うり波浪の四支の働うねを寝ひ今は苗ぬと喜び娘をかげ
 こそこの何ぞ料ん我子万子代朱は流ましく自心移まうり。おまごんこの
 波浪の波氣のこくたまて。おのふ我子ゆゆる。此とこころ入を麻さるぞ
 泣しきこころんさをうねのふ万子代とゆきせと究西の海まそのおひも
 泣より外のゆそは。斯は撥れんとをんた。た人鬼神まのこころの

小栗卷之六
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

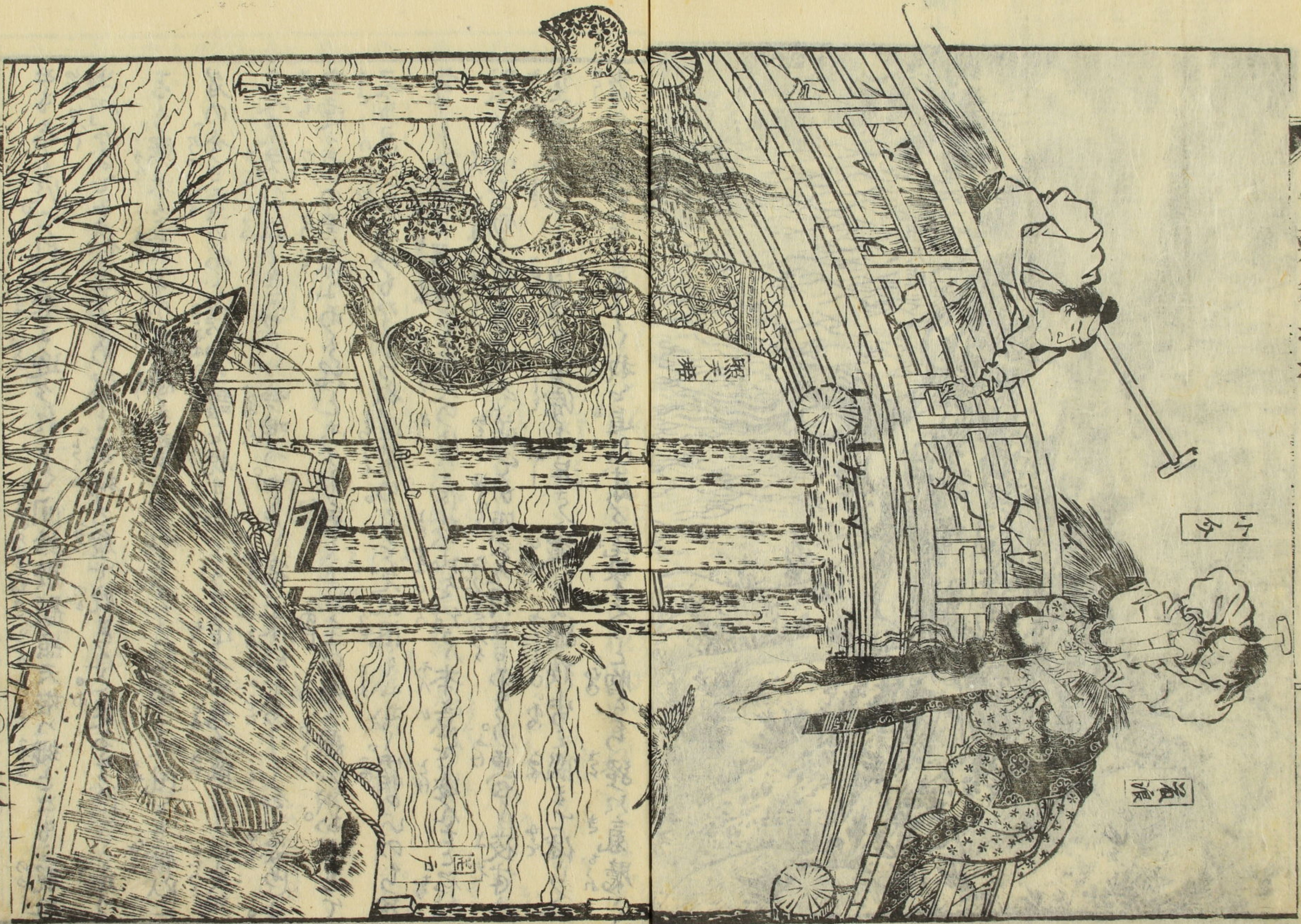
角をさぐらふ我子に別れを邪の怒れ心火奔勃。巻を捲り齒切せし
 か。休嘆と云ふ。しる必竟照天が倣業なり。あぐら雷き女。おらて我子
 の仇敵討て怨を晴さんと云わがう。声をあげや。城にけるあり出會と。
 して高きもあつれ。さうは回意ののどげね。あぐら。いづれと。何れも。
 城を渡らせし。所は往裡の光景。あぐら。のほゆ。そらう。人空陣の。
 けぬけの睡禰の。と。主ハ影。さう。あゆ。再び。おどろく。友。あみ。が。
 不思議。おら。ひ願望。せ。裏。うら。ひ。れ。そ。と。より。り。て。人。の。出。る。さ。ま。
 なれ。さ。て。子。供。等。我。深。を。照。天。に。知。し。此。所。より。伴。ひ。流。し。ぬ。べ。し。
 親。子。の。あ。ら。わ。り。ひ。好。ま。て。心。を。さ。せ。ども。子。ハ。其。事。を。舟。を。賢。立。
 きて。母。親。を。欺。た。ぬ。こ。そ。思。な。れ。足。彼。お。ひ。め。づ。せ。照。天。に。迷。恨。流。
 ませり。彼。も。走。り。去。り。ても。遠。く。い。は。そ。逃。る。は。し。い。ぎ。逐。急。て。こ。ら。子。の。
 仇を酬つあ。と。走。り。出。ん。と。さ。る。折。る。船。械。を。か。び。て。主。の。小。女。夜。細。の。還。ふ。
 間。か。く。も。門。辺。を。さ。と。行。遭。ぬ。主。河。り。と。や。の。妻。よ。お。も。更。ぬ。う。ふ。と。で。
 ひとり。何。方。へ。と。行。す。あ。ら。わ。り。と。同。が。れ。が。ゆ。と。回。意。も。長。月。の。
 みる。と。踏。く。と。さ。さ。さ。さ。と。あ。な。く。雨。雲。あ。ち。月。影。の。暗。れ。ま。ま。さ。れ。波。浪。を。
 照。天。の。跡。を。追。ひ。行。き。り。そ。も。く。此。小。助。と。い。ふ。と。これ。後。は。小。女。お。ら。く。
 照。天。姫。の。行。跡。を。尋。ん。と。兄。美。登。小。四。郎。と。さ。も。に。所。を。捜。索。う。ふ。相。模。の。
 國。小。居。る。す。い。ま。と。何。れ。の。知。とも。知。ら。ぬ。此。地。方。は。僅。の。知。音。あ。れ。が。
 姫。を。捜。索。し。便。の。と。兄。美。と。居。を。卜。て。小。四。郎。を。圍。戸。と。な。り。
 常。陸。と。天。名。一。つ。ら。女。子。を。買。と。う。と。を。と。これ。照。天。姫。の。一。句。は。い。
 どの。う。と。あ。あ。て。なり。小。女。の。漁。師。と。なり。磯。倉。辺。を。と。も。株。細。姫。乃。
 在家。を。り。と。あ。は。は。然。る。小。女。の。その。郷。土。の。水。人。は。因。り。波。浪。万。千。代。

圓通菩薩の
方便
熏松の
危難
と
救ふ



照天炬

救浪



照天燈

今

瀬

園戸

新巻六

新巻六

ともあらはに。これを妻に迎ふれと。同話歌題照天姫の城ととも。脱れ
 出何手なとそれとさ。あは縁と毒婦の跡を脱るんと足おきよし。こ走り
 まり。照天を素より深窓も養ふまぬるをなれ。あは風をも厭ひし
 身の今日益のやど。檜山の窟を脱れ出より。追人の為を憐れ夫死
 せ入え夫ひ泣しきさうら吟呻つ。やうく宿を求好て少くも安ぬか
 安達が京の黒塚のあは縁とあは鬼く。丸玉の姥悪公おととて
 又も思ひ出ふみもな。らぬ道楽のよとえ。た風も心かく。露のしのりか
 めうく。て夫よ還命と后父の仇。をな。檜山をけく。本意を遂んとせし
 かくて心を励し。車方さして。流せぬ。九月廿日のまうり。更にく夜すの
 空をみ吹く。風の身ゆ。流る。足さ入。鐵沙。踏抜。歩と。憐れ。て。休ら。る。バ
 峯う。波のよ。さ。ま。ま。く。我を追ひ。ま。る。尾。撃。入。ら。と。胸。ら。ら。経。ぬ。氣。騰。く

とある松の木下に身を潜めて。空窺ふ。其。端。も。は。松。風。の。それ。何。れ。ぬ。人。城
 のふ照天よのふと。呼と正しく。波浪の声。と。あり。は。お。そ。つ。く。消。れ。う。せ。え
 む。り。も。て。身。を。陰。さん。と。と。ね。し。も。も。か。り。も。後。浪。之。身。の。照。天。と。目。け。追
 め。ぐ。り。既。に。捉。ら。れ。ぬ。べ。う。へ。う。へ。は。時。に。不。思。議。や。照。天。の。身。より。一。條
 の光。赫。くと。閃。き。出。波。浪。眼。眩。と。近。寄。ほ。む。と。怪。し。や。と。海。り。け。我
 を。し。め。よ。り。して。心。だ。け。ほ。む。と。と。ひ。い。ふ。さ。て。の。変。化。の。あ。り。な。れ。う。は。く。人。と。な。り。く
 追備院の法師玉藻前といひ。は。妖。婦。より。光。を。放。ち。と。い。ふ。波。も。正。け
 野千の化と。ぬ。ら。と。あ。て。の。ふ。ん。と。ら。ん。我。欺。く。れ。て。万。代。を。殺。し。今。又。妖。賊
 奪。れ。り。想。之。の。な。ら。ば。恨。め。り。の。う。か。魔。術。を。行。ふ。と。も。や。う。脱。し。か。く。死
 と。照。天。姫。お。ま。り。か。つ。て。み。と。人。川。居。の。嫌。て。涌。備。の。短。刀。の。鞘。の。ま。ま
 あ。こ。し。け。ら。敷。手。居。り。て。照。天。姫。阿。と。一。声。叫。び。が。その。ま。ま。其。所。に

後入り。城の周章慌忙ておのが身とりて姫と西渡ひ。この情はと止る。
 友浪息ち身を伸し。まご打下を短刀の鞘抜散り思ひども。勢が肩先
 ざりと斬る。切られく阿と叫び伏せんと驚く。友浪が慌忙く抱おどし
 膝よかまきの一声らうみ。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 も邪えの友浪も子故の暗小氣もくられて。そのはして生せむ。城を
 中うく心はきいとおひ。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 流し。苦し息をあらと衝つ。呼吸は穢き。おん身の心むくつ。うら世お
 例が。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 照天姫のまなつ。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 多う。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 心あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは

こころ思ひ止り。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 姫と目玉を換き。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 欺く天罰。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 前車の戒。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 老う。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 免れ。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 聴。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 ける。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 よめ。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 と放。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは
 の身。おののめは。あつらふも免してよ。心とたうり。おののめは

正しく野狐の變化して小栗の家を亡とたつて人爾まゝ仇めてあつたやハ
 そを赤くど母とのみむぐとあるとどふや嗚呼愚かな我子とむぐく
 姫が正勝を顕しんせんときかほを城法におしちめ奴家がいけを安ん
 今宜のせいの言語に夫の身とおのぐお代らきりともへいあつたり
 万々代丸のふりなりややいあ人と同くれば波浪を念の涙に咽び語り
 生とも腹すじ我姫の牙おはき宝を奪ひまんとし卧し入るるに
 甲夜よ寐させし所あつた万々代丸は寐せしり我をのらちもいせはの
 黒夜まのやちも赤く寝て我子なりとあまあども白刃をりて睡襖被
 三刀四刃刺せられ燈をかげておあふあふあわぬ我子の万々代
 朱は流して息絶えりこれりと怒るき嘆らんとその甲斐きらまなくも
 万々代丸が卧しをいねば人影まなくと脊戸にけり逃げ知るは
 我子の仇の照天姫逃しつたつじとその跡を慕つて世を平てすつた
 間なく姫が行遭つたつておせりま前後を舟を撃つてを念に恨まん
 那ははつたふ魔術をあて不図我子小重傷を負ひけり嘆とるるに
 足渾照天が来るまもかりんがける仇敵おひあつしてんをまきと
 眞意の煩髪胸を灼し再び照天を呵責せんと牙かき入ると城は泣く
 そりまのりさつての万々代丸もあんなものやを殺しあつ嗚呼は様や
 めさほや主君を弒しなるといひまらけり悪逆の天罰をかく被ひ
 守るゝ一人あつて二人まゝに現在我子ともおかけて憂とるるに懲も
 せど尚悪心を暮らると天魔が心入りかたり大逆無道とあるあつ
 過世いふは因果もく親子となつたりはあど親の倣くは罪咎の
 子のさかへはとせつたりとも生れ命あつてはばこのまゝ死す

正しく野狐の變化して小栗の家を亡とたつて人爾まゝ仇めてあつたやハ
 そを赤くど母とのみむぐとあるとどふや嗚呼愚かな我子とむぐく
 姫が正勝を顕しんせんときかほを城法におしちめ奴家がいけを安ん
 今宜のせいの言語に夫の身とおのぐお代らきりともへいあつたり
 万々代丸のふりなりややいあ人と同くれば波浪を念の涙に咽び語り
 生とも腹すじ我姫の牙おはき宝を奪ひまんとし卧し入るるに
 甲夜よ寐させし所あつた万々代丸は寐せしり我をのらちもいせはの
 黒夜まのやちも赤く寝て我子なりとあまあども白刃をりて睡襖被
 三刀四刃刺せられ燈をかげておあふあふあわぬ我子の万々代
 朱は流して息絶えりこれりと怒るき嘆らんとその甲斐きらまなくも
 万々代丸が卧しをいねば人影まなくと脊戸にけり逃げ知るは
 我子の仇の照天姫逃しつたつじとその跡を慕つて世を平てすつた
 間なく姫が行遭つたつておせりま前後を舟を撃つてを念に恨まん
 那ははつたふ魔術をあて不図我子小重傷を負ひけり嘆とるるに
 足渾照天が来るまもかりんがける仇敵おひあつしてんをまきと
 眞意の煩髪胸を灼し再び照天を呵責せんと牙かき入ると城は泣く
 そりまのりさつての万々代丸もあんなものやを殺しあつ嗚呼は様や
 めさほや主君を弒しなるといひまらけり悪逆の天罰をかく被ひ
 守るゝ一人あつて二人まゝに現在我子ともおかけて憂とるるに懲も
 せど尚悪心を暮らると天魔が心入りかたり大逆無道とあるあつ
 過世いふは因果もく親子となつたりはあど親の倣くは罪咎の
 子のさかへはとせつたりとも生れ命あつてはばこのまゝ死す

死別と海士の小舟の楫を断警者の杖を失ふ高活場。おひひと
 のふ波浪ぬよ。おん二人の子を失ひ。さそ悲しくおんこころ
 おほし此身なり。是までの事想ひ久。奴家を使つたりのなりと。お母
 憐れま入じ。中がてせよ。おん其耐を夫。法とも給て。老父慰め。遠く
 ざ。かゝぬとを想ひ。病多ひと忠申す。お母語を和め。こころり。
 我子の別ふ波浪と嘆ふ。くれば唇より。照天が言。結を。せよ。いも。まこと
 思ひ。物と悪念の怒の眼血と。そ。れ。鉄。馬の歯。をかみ。おひ。踊。か。ら。て
 照天を。抱。へ。ふ。ま。さ。く。く。も。え。の。う。ね。お。の。れ。い。う。る。変。化。ゆ。て。魔。術。大
 まらけ。二人の子を。我。ま。ふ。か。け。て。殺。さ。し。お。れ。尚。も。こ。お。を。誑。し。命。生。入。と
 せ。ふ。や。恨。と。そ。る。我。子。の。仇。申。う。る。暗。き。て。置。へ。ま。さ。お。の。れ。が。方。と。生
 ら。ふ。心。の。誓。ふ。う。と。と。も。尚。飽。中。と。お。り。ふ。う。ら。家。と。お。経。責。咬
 その正辨と。お。た。し。弄。殺。し。此。物。の。恨。の。想。ひ。と。嘆。く。ん。お。覺。悟。と。せ。よ。と

い。ま。う。た。れ。つ。磯。の。小。舟。の。全。部。細。これ。さ。の。ひ。と。ま。る。よ。り。を。や。く。る。手
 小。舟。小。舟。り。て。傍。の。松。の。枝。の。び。て。小。松。の。枝。を。楚。し。打。弄。し。光。景。と
 繪。は。画。く。地。獄。の。罪。人。が。悪。鬼。羅。刹。は。呵。責。され。苦。難。を。受。ふ。異。と。と
 照。天。と。苦。痛。堪。え。う。う。う。邪。見。の。人。の。う。と。も。二。人。の。子。お。ど。も。と。失。う。う。う。
 心。を。殺。む。の。の。ら。ん。と。お。と。悪。念。亦。悔。と。殺。し。も。中。て。斯。々。の。真。愛。恥。ん
 と。う。う。鬼。う。蛇。う。彼。中。山。の。狼。う。い。情。な。れ。波。浪。や。天。と。仰。ぐ。唾。を。れ。べ。必
 其。身。お。か。れ。と。ん。世。の。流。う。と。あ。り。は。く。も。己。が。子。と。も。お。の。が。る。お。殺。せ
 正。ま。足。主。家。お。仇。と。る。報。ひ。と。し。と。を。希。へ。と。奴。家。を。り。て。子。の。仇。と
 多。く。罪。を。醸。と。と。く。と。う。や。奴。家。未。練。命。と。惜。と。逃。れ。ん。と。あ。の。わ。ら。ね
 とも。此。身。お。つ。た。顔。の。り。と。を。果。さ。し。死。を。厭。へ。我。志。を。遂。く。の。后。と

照天が貌もささうめい。人々もささうめい。まて罪のまが。烟の裏よりかきこげも
 苦しく叫ぶ声さるにぞ。波浪足さうらちまで。ゆらゆら。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。
 神通自在なる。狐狸うのとて。今もさうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。
 とさうらちまで。拍て雀踊り。尚もまて。松の小葉を折る。只願まて。さうらちまで。
 が後あつ叫ぶ声もせ。さうらちまで。波のうらちまで。波のうらちまで。波のうらちまで。
 照天がさうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。
 さうらちまで。は観音のま像も。ありさうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。
 愕然とて。居りし。放逸を慙の白。知の斯は奇特と。さうらちまで。さうらちまで。
 菩提の心と。発記せ。さうらちまで。菩提の心と。菩提の心と。菩提の心と。菩提の心と。
 り。おのれ照天の古。狐我の。体仇あ。二人の子。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。
 魔術を。我と。欺ん。此観音も。正は。足変化。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。

して。毛を。剃り。短刀。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。
 教条の光を。放ら。瀨戸橋の方へ。飛去。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。
 の尚も。さうらちまで。腕を。さうらちまで。後悔。我事。寛く。して。脱。さうらちまで。さうらちまで。
 易く。縁彼。さうらちまで。神通の。あり。とも。一念の。サウラチ。さうらちまで。さうらちまで。
 を。まて。飛去。佛の。跡を。さうらちまで。追行。今。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。
 の一件。と。圓通菩薩の。利益。照天姫の。危難。と。救。且。波浪。が。悪
 念を。菩提。菩提心を。發記。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。
 掃却。嗔心を。募。佛。仇。さうらちまで。方。又。涉。且。説
 照天姫の。波浪。が。お。担。一。樹の。松。に。綁。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。
 今。の。ち。何。も。知。思。免。れ。て。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。
 ま。して。走り。瀨戸橋の。辺。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。さうらちまで。

ちのの岩ふ腰うちうけ勢付体はひ居るし小首ゆかけたる守本尊の
 いと将中へおほえたるわがあつ煙しと肌を守りし牛し小言は居あきけ
 ちて手盥はと漱き観世音の厨子と困死舞しをんととせよはわとけの
 体しやうのののやと誓く折とめれ西北の方よりして一圍の老物忽然
 としてお母の厨子の裏へ入よとえへがめし観世音のる像あつまうあふ
 照天の奇異の想ひをばし熟く染ももるふは身うち煙しと誓り在とあそ
 さての奴家が身替ふませまふのりがやと歎我の涙せれためを幾許
 回うれ拜し佛因の行を感謝せり。さてその后は行末のゆづもと慇懃ふ
 頼みまじと折く身りし松枝の杖を傍中突とて大慈の悲願空うら
 を夫婦再會して維玄横山をけし多宿志を遂るやごうふふふと
 とれたねのおよ常盤の翠とんせま人と深く祈念し一首の和歌と詠はる。

折言ひしあらのちの志の常盤は体抄よ千年けとえとはうせと。

と口早し観音菩薩のる像と再び首ゆかけまめと世父の本國をわが一まづ
 常陸へ赴ひと昔の好身と尋んとををさうめ瀬戸橋をうち渡らんとして
 処よあひひけお後背より声をもかけと波浪うらまきとのぼして襟えん
 ちと握りし倒し中を照天の古狐一回うらば幾許回つれを欺く奇怪
 さよ這回とほと脱さじと氷のこえ短刀と胸のほとりおあめて。既ふ
 刺んとあうりして照天姫と今をや脱とる時とえ悟しつ心裡中念ふは
 ちり迎も死をばた命うらふふかから恥らんより入水しても自害せん
 その身を恥うめとてこの本文もかあひやとは南無や観音大菩薩
 今世と福なうめとて未だの助けあまうれと祈ねをうらむと波浪が
 ちん腕をうらとあち。身を繋ぐしと瀬戸橋の上より川へ飛らみり。

かた折つら一艘の小舟を潜ひて暮るりしが。恰好姫とこの舟に艦乃
 方へぞ落ゆちの。照天と高たると後より。落るる舟をば目くらめまき
 舟と見えぬく打たば。氣も消へあつても失せたり。其時、息を絶て
 ざり。時は名のうちよりして一人の漢子あつたれ出照天姫がま抱き
 ぬきひ名の裡ゆ入まば。船發うきひ船長と船をまきまきくまのふ
 けと藤浪とてびとけりともおのひの針より逃へ念りやはし
 りまきまきく。漕けく舟の跡を追ひ走せんとせられとろく不圖も
 夫の小助間かくもこと行遭たり。あま我妻と捉ゆまづのふ家夫
 妨げせよかきまづれ仇の照天の姫にま脱しつるの付らみを暗と
 ことあらん其所をねと縁と刃を向けを。小舟と父く俄然とさく不
 姫君とろくくとも。此正よ呻吟事とあむじう。その何方とと船壁らら

波浪を中。是よりぬけて逃げくと。後を逃さざると。こめて押へく足一
 ぬまへ今と何をもはままんや。我々各武の譜代の臣美登の小助といふ
 ののなり。照天姫と家主なり。その法去向をよぶゆくと。斯まぐり舟を
 我よりと。知くぬ事と云なむ。主君が仇とらむ。我妻と云なむ
 かに夫婦の縁を断とも。つね姫君を仇とせり。波浪をより。齒切を
 汝も照天は方人う。あまきりて。後れ我妻と云はるる。このこそ無念なり。
 つねつねと小栗波重の籠妾なれ。波浪を照天の残子の妻たり。さきん
 幻術をり。二人の子がう。あまじう。怨まわり。女魔の女生あつたや。汝
 つまみまきく。斯こそまれと。短刀を逆手おりて。突かくま。少助
 あつたやと。身をかたし。その手を投へ短刀を取より。身を中。波浪が心下。汝
 ぐま。刺とさく。ねく。叫ぶ声。ゆも。川へさんぬ。と。投中。と。姫をさ

三十一

小栗外傳の跡を慕ひて走りきぬ。嗚呼この毒婦は浪道理に疎く
 佛の方便を解と大逆を慕ら。夫の為に非命に死。遂に不糸の鬼と
 なす。足渾つが作業の報なり。禍福無門惟人所召と云。夫は木乃
 こころを云々。

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

小栗外傳卷之六終

○繪本藏版目次 皇都書林 三條街 吉野屋仁兵衛

繪本平泉實記	前後十二冊	靈狐奇談繪本雙忠錄	十冊
兼久軍談 鎌倉太平記	前後十二冊	茶店墨江草紙	九冊
寒燈夜話 小栗外傳	自初編至三編 十八冊	繪本頭勇録	十冊
繪本金花談	十二冊	自來也説話	前後 十二冊
同 彦山靈驗記	十冊	相馬將門總援偕語	自初編至三編 十五冊
同 金毘羅神靈記	十冊	則定仁勇傳	八冊
同 箱根靈應傳	六冊	安信仲喜 輪迴物語	五冊
同 義勇傳	六冊	小野薑一代記 八十嶋影	十冊
同 孝感傳	十冊	蜚少女玉取草紙	七冊

長柄長者鶯塚

六冊

繪本一休譚

六冊

三三間堂棟抄奇傳 柳乃糸

五冊

河内未綿團七編

六冊

河内未綿團七編

五冊

三竹 擅風物語

五冊

小説峯の吹雪

五冊

信本發切傳

六冊

推八小紫 母双い名語

五冊

中將姫一代記

五冊

繪本浪華男

五冊

同 行狀記

七冊

管語波の露

六冊

一休 狂入

三冊

繪本羽衣譚

六冊

新吟笑の友

五冊

報仇親子墳

六冊

花街風流解

三冊

孝子美談 唐の娘

六冊

新編女水滸傳

六冊

繪本雪鏡談

十冊

繪本孝女誓

三冊

同 二嶋埜男記

十冊

同 鮎の腹帯

三冊

同 龜山話

十冊

同 新撰勸進噺

五冊

同 沉香亭

六冊

廓中掃除

五冊

小野小町一代記

五冊

教訓 初篇二篇三篇

各二冊

鏡山列女功

六冊

同 初篇二篇三篇

各二冊

復讐琴松譚

三冊

同 初篇二篇

各二冊

同 武逸談

六冊

同 釋迦八相物語

五冊

阿波の鳴門

五冊

同 代記

二冊

源平漆合州

同

同

二冊

